若越郷土研究
34の2

今立吐酔とグリフィス

山下　英一

はしがき

この小論で筆者は今立吐酔を吐酔（トスイ）と書くことにする。なぜなら明新館の十六歳の吐酔少年を先生のグリフィスはトスイと呼んで可愛がり、またこの稿を書く上で大変お世話になった鯖江市松成の満願寺第十七世故今立成因氏が筆者との対話のなかでいつも吐酔さんと呼ばれて敬愛の情をしめされていたことを憶えているからである。

いま何故に吐酔を書こうとするのか。吐酔について筆者はすでに「グリフィスと今立吐酔」（「英学史研究」第八号、一九七九年）と「グリフィスと福井」（福井県郷土新書5、一九七九年）で書いた。いずれもグリフィスの福井日記と吐酔の父乗永宛の米国留学便りをもとに、両者の衝撃的な出会いから、学問上の協力に到る師弟関係を筆者の専門とする英学の観点から述べたものであった。

しかしまだ書き足りない気持ちがいつも残っていた。明治の四年の福井で真宗の寺の息子がキリスト教徒の住居に住み込むことを決心しその異教徒を大いに感動させた。そればかりかグリフィスは吐酔の日本に関する知識と彼から習った英語、フランス語の抜群の能力、その人となりを大いに買って米国の学校へ留学させた。そして西洋の理学を修了した吐酔の日本に帰ってからの歩みは如何なるものであったか。

こういう思いを成すに至ったには、資料として留学時代の吐酔がグリフィスに送った一六通の英文書簡（ラトガース大学グリフィス・コレクション蔵）を読むことができたこと、先に述べた吐酔を生涯の師と仰いだ成因氏の記録に再度触れることができたことに由る。成因氏は筆者などがグリフィス研究に興味をもつようになった今から二十年前以前にすでに吐酔との関係でグリフィスのことを記録しておられた。そのなかに〈昭和三十七年五月、吐酔大人の事、成因氏〉と表紙に墨書したノートがある。筆者などの百倍も吐酔を愛した人（当時七十四歳）の心が文章を通してそこに光っている。そこで先ずそれをそのままに記載することからこの稿を始めよう。（句読点、現代かなづかいは筆者）

吐酔大人の事　（今立成因）

吐酔氏は安政二年誕生。幼名を芳丸（ヨシマル）と申したのですが、幼き時より資性、聡明英智、且つ又徳性温厚な人であって、衆人より神童と称せられたそうであります。古老より曽て聞きました伝え話によりその一つ二つを申して見ますと、五歳の頃、熱病に冒されて病床にあってウツツに阿弥陀経を宙に誦して、その一字一句も読み違えしなかったということ。又十歳頃の事、近村の数学の先生の所へ習いに行かれしに四、五日経てその先生がもう比の上御前に教えることがないから帰んなさい

と言われたというような話などがあります。吐酔という名前について。十四、五歳の頃、福井に出て初めて学問をし初めた頃、福井の禅寺、孝顕寺の和尚（此の人は有名な人であったらしいのです）が氏に対して芳丸という名前は子供らしくて面白くないから善い名を考えて付けてやると申して涅槃経を出しその中から六カ敷い「吐酔」という文字を見出して、これにせよといわれたがその起源だそうです。号は「如洋」というのを晩年まで用いて居られました。心懐、洋々として春の海の如しというべき本当に氏にふさわしいものと存じます。氏の若年の頃は丁度、明治の初頭、国情激変の時期であり福井においては旧藩主松平春嶽公が明新館という学校を創設し、当時として余程進歩した思想を持ち、率先して泰西の学を奨励し、英国米国人等の外国人を教師に招聘し、藩内の士族出身の者及び一般庶民の有為の青年を入学せしめて大いに学事を励ましたのに際し吐酔氏は選ばれてそれに入り、そこで新時代の学を受けることになったのです。入学は十六、七歳の頃かと思われます。そこに在学の時、米国人の教師グリフィス氏と相知るようになり、学生中グリフィス氏に最も可愛がられグリフィス氏が福井を去り東京の開成校に転ずるに及び、吐酔氏も一緒に行かれたようです。グリフィス氏は東京にも長く居らず、明治七年帰米したのですが、その帰米の際、吐酔氏に米国に来り修学するように慫慂したので、吐酔氏はグリフィス氏に同伴渡米する事になったのであります。吐酔氏の在米期間は五カ年であったのですが、その間フィラデルフィヤの大学に入学。その在学中の成績は抜群優秀であったそうです。現在当方に残っておりまするその当時故郷の両親宛発信の書状を読んで見ますと、自分は級中の首席になろうと思って勉強しているのだが、此の国のきまりとして外国人はたとえ如何に成績が勝れていても、首席には決してしてくれないという事であるから已むをえぬというようなことが記してあるので想像することが出来ると思います。ところが初めはグリフィス氏の世話で入学せられたが、暫らくしてグリフィス氏は吐酔氏に対し耶蘇教の洗礼を受ける様勧めたそうです。それは洗礼を受けて耶蘇教徒という事になれば、学校より給費せられ楽々と学業を続けることが出来るからというのであったらしいのです。しかし吐酔氏はそれは断じて出来ぬという所から、グリフィス氏との関係が工合悪くなり、後にはグリフィス氏と離れてしまわなければならなくなり、その為めに吐酔氏は経済上非常に困却されて自給自活しなければならなくなり一時馬丁のような仕事を勤められたこともあったとかいう話です。その際偶々渡米中の日本官権の一要人之を見て同情し何とかしてやろうと思ってくれたのだが、聞けば吐酔氏は西本願寺派末寺の者と知り、西本願寺に照会して見たところ、西本願寺よりはそういう者が居るなれば西本願寺に於いて給費留学せしむることにしてやるという事になった。（此の一要人の好意によって若しその時西本願寺がなまじっか給費生にしてやるという手を出さなかったならば、その一要人が政府の方の留学生にと話してくれて後に吐酔氏の為になって反ってその方がよかったかの如くと思われるのであったが）とも角もそういうイキサツで西本願寺よりの留学生として学校に学び続けることが出来て一先ず好都合であったのです。

その内、明治八、九年頃時の西本願寺内に政変あり内局の模様一変し新たなる人の内局登場するに及び吐酔氏への留学費の給与の路絶え、又々困難に直面するに至る。而も故郷の老父病篤しとの報に接して吐酔氏は已むなく帰国の途に就かざるをえざる事になったのであります。後に吐酔氏に聞きしところによれば、氏は米国大学中に先ず日本の欧米に後れている理学方面の知識を獲得し基礎を作り而して後英国に渡り、当時英国にありし有名なるマックス・ミューラー博士に就いて印度佛教の研究をしたかったのであるが、そこまで至ることを得なかったのは残念であったのだとの話でありました。

上記の如く学の半途にして帰国の已むなきに至ったのですが暫らくして京都府の教育の顧問格（職名の程は確かなことは承知しませぬが）という様の地位を与えられ、当時新教育制度の組織の参画の衝に当り、中学校を創立する事になる。吐酔氏は米国の学校事情を知るが為に府よりその創設に関する一切を委任せられ所期通り中学校を創設完備し、その初代の校長に就任せられたわけである。

昭和五年十月神戸沖で海軍大観艦式があった。その際芦屋の地に吐酔氏を訪ねた折、その二、三日後京都の中学校で創立五十周年記念祝賀会が開催されるにより、氏はその招待を受けられてその席上読む祝詞を認め、其の下書を私に読み聞かせられた事を記憶して居りますから、それから考えて見ますと明治十四年頃創立せられたことかと推測されます。

その開校式日（開校式日ではなくて他の日だったのかも存じませぬが）偶々其の頃御西下中の明治天皇陛下が御臨御あらせられ、氏は校長として陛下に新中学校の模様、内容、制度等を参上説明申し上げしところ、陛下には御満足げの御様子であらせられたのを拝し一生の思い出であったと私に物語られたのを記憶して居ります（時代も時代でありますが、中学校として陛下の御親臨を仰ぎたることは空前絶後の事で御座いましょう）。時に氏は二十六、七歳かと存じます。吐酔氏は此の中学校に校長として在職すること八年でありました。前の久邇宮殿下はその時の教え子であらせられて、又古在東大総長などもその節の教え子の方々であったかと存じます。

其後、造士館、長崎商業学校を歴任せられ、それから後は多く外務省に職を奉ぜられ、又日清戦争直後、暫らく北京の日本公使館弁理公使を勤められた事もあったのです。それから横浜に在って外人に対する法律関係の事務（外務省属）にたずさわって居られたこともあるのですが、晩年には神戸近く芦屋の地に閑居して居られたのです。七十七歳の時、東京の嫁して居られる、娘御（松谷家）の方へ遊びに行かれて、そこで病を得、昭和六年五月十日あえなく終焉を告げられた次第です。葬儀の際、久邇宮殿下家より御香儀、御使者の弔問を賜わりましたことでありました。久邇宮殿下には殊に御親しみ深く、氏を敬慕して居られたということです。殿下の御親懇に遊ばれた御様子は次の事で窺われます。それは殿下がお若い頃、教えを受けられた親しき仲である関係から殿下から御招きの御言葉があって、氏が殿下家へ伺候し玄関に通じ、奥室の所逞参ると、そこから殿下は戸を閉じ、人を避け、氏を上席に控え御自ら接待餐応遊ばされ、そして先生先生とおよびになり、昔しながらの教え子であられた時の御気持のよ

うにならせられ、御なつかしそうに御歓待下さるので氏は甚だ恐縮に存ぜられたとのことです。殿下には氏が伺候申し上ぐることを余りお喜びになるので毎年、年に一度宛きめて御機嫌伺いに参らるゝことにして居らるゝが、殿下には其の日を心より御待ち下さるゝようの御様子であったといつか氏が漏された事でした。

私が東京での氏の訃音を聞き汽車で急行し霊柩の前にぬかずきました際、同夫人が御棺の蓋をあけ御顔を拝せしめてくだされたのですが、其の時拝みました貴とき御顔には一点の陰翳もなくあだかも天上界より降り来て七十七年の長き間勘忍土と称せらる、雑染雑穢の穢土中に住みつつも、それには全く染まず汚されず無事一生涯を了え、今や又天上界に帰還、否浄土へ往生されたる御姿その安らけく瞑目の御風貌を拝見し尊とく感じましたこと今だに髣髴として眼に見る心地が致します。氏は又両親に対し孝心厚い方であったのです。父君が死なれてから後、母堂を老後安楽に送らせて上げたいとの孝心から、田舎の郷里より氏当時在住の京都の自宅へ連れて行き、自から毎日給仕し種々手厚く孝養を尽くされたのです。此の母堂の方もすぐれた賢夫人であった事は残っている数々の逸話によって分かるところなのです。八十二歳で亡くなられたのです。氏は寺に生れられたのですが、分家し還俗して生涯を果たされた訳で、従って佛教専門の学業を致されたわけではなかったのですが、氏の三十二歳の年に米国人ヲルコット氏（有名な佛教学者）の著『佛教問答』を飜訳せられた刊行本が残って居ります。又晩年七十四歳の年『歎異鈔英訳』本を鈴木大拙博士のお話しで大谷大学より出版されたのがあります。

氏は聡明の智、寛厚の情を兼備した高貴な人格でありました。接する人上下老若皆其の徳を敬慕せぬ者はありませんでした。又その風姿は実に端麗で立派でした。（御面の風貌の如きは必ずしも内的精神とさして関係のあるものでもなく、兎や角言うべきものでは御座いませんでしょうが）氏の場合に於ては正に其の内の精神と一致せるものと思われました。だが人界にうけられたる氏の数奇なる運命は幸なるものではありませんでした。智情兼備有為の資を稟けながらもそれに相当する所謂比の世の富貴栄達に恵まれなかったのです。がしかし氏自身は毫もそれを念頭にかけられなかったようです。それで濁悪なる世界に住みつつ一点それに汚されず煩らわされず至極平和なるうるわしき心境で一生を終えられたものと信じます。

グリフィスと吐酔の出会い

このちょうど一回り違う師弟の強い結びつきは、吐酔の美少年であったことに大いに理由がある。グリフィスの福井書簡に始めてトスイのことが出てくる一八七一年十一月始めの手紙から少し長くなるが引用してみよう。

〈みかんはあまり熟していませんがもうすぐです。柿（米国のより約四、五倍大きく、味も違います）が鈴生りです。大根（大きくて白く長くターニップかラディシュの種類で、これが普通に利用されている）はよく成長しました。毎日一二人ぐらいの男女が私の家の方から川に入って流れに立って大根を洗っています。私の家のすぐ川向うが三岡（現在、明治政府の高官）の家で、その長い庭にお金

をかけた大きな神社（高さ一八フィート、まわり四フィート）が建ったばかりです。その家の左は通りと橋があって、いつもにぎやかで日本人の生活と風習の良い舞台となり、私はヴェランダからその研究ができます。私の家は今、大勢の家族で本多、大岩、中野らが入っています。大岩、中野（二人とも私の助手）は一つ部屋にいて、他の部屋に笠原（カール）がいます。笠原は目の輝いた可愛いい少年で、頭が良くて非常に礼儀正しいです。本山（三〇〇マイルも遠方の肥後出身）は私に学ぶために福井に来ました。私の前の米国生徒の一人、沼川（一八六九年、ニューブランズウィックで姉さんもお会いになった）の推薦です。吐酔もまだ十五歳のすばらしく頭の良い少年で、女子のようにおとなしく、ブリリアンカットのダイヤモンド（目ざましい才能を意味する―筆者）のように輝く才能の美少年です。吐酔は仏語、英語、化学を学んでいて、私の仏語の組の少年を教えています。吐酔は寺の子でしたが、寺を出るようにとの私の懇願に長い間、否定の返事でしたが、ついに金のししゅうの襟と長いちりめんの衣をたたんで、今は寺を離れています。もちろん一つの部屋に三人は楽に住めます。彼等の寝床はふとんなので、昼はすっかり片付けておきます。食物はほとんどまったく米です。夕食の時、私は米しか食べません。それでみんないっしょに食べてなごやかにすごします。学校は小さい学校と大きい学校の統合で約二〇人の教師が不要になり（大改革、有益）、数学（初等、高等）は、全員必修の科目です。剣術、柔道、乗馬の学校の廃止、化学の新しい組が作られ、実験室の分析化学の授業に一〇人が選ばれました。市内に一三の学校が組織されていて、読み方、書き方、算数、法律の公式用語を読む練習、五ヵ条誓文などがおしえられています。これらすべてが進歩を意味します。私の提案で科学、地理、発明品、技術の公開授業を週か月ごとに市内の各層の人々に行う計画を立てているところです。〉

吐酔がグリフィスの福井日記によると、寺を出てグリフィスの異人の家に住み込んだのは十月十九日の木曜日であった。眉目秀麗の少年なればこそ吐酔はグリフィス青年に愛されたのである。その家での日曜礼拝の記録を見ると、〈一八七一年十月二十二日。美しい秋の日。七時半に起きた。大岩、吐酔、中野とマタイ伝第五章を読んだ。十月二十九日。カール、吐酔、大岩、中野とマタイ伝第六章を読んだ。十一月五日。美しく晴れあがった日。激しく気力あふれる。家族全員で山上の垂訓を読み終わった。十一月十二日。今日、住み込みの生徒といつものように聖書を読んだ。十一月十九日。快晴。いろんなことを思ってだらだらと九時まで寝ていた。五人の生徒と十二時まで新約聖書を読んだ。十一月二十六日。美しい日。八時に起きた。いつものように新約聖書を読んだ。十二月十日。九時半に起きた。晴。吐酔、大岩、肥後と新約聖書を読み、その後、カール、吐酔、本山と賛美歌百三番、百四番を歌った。十二月二十四日、美しく晴れたおだやかな日。八時に起きた。中野、吐酔、大岩とイエスのたとえばなしを読んだが、大へんおもしろかった。夜、お茶の時間にアメリカのクリスマスとその風習について話した。少年達にストッキング（足袋）をつるしておくように言うと、おもしろがってそうした。星の美しい夜。十二月三十一日。

雪。八時十五分に起きた。家族で十一時二十分までマタイ伝の第十四章、第十五章を読んだ。日本の政治と浦上キリスト教徒について話した。大岩が一年前キリスト教徒が流罪になって福井を通っていった時のことを話してくれた。一八七二年一月七日。九時に起きた。十時まで大岩と話した。十一時までマタイ伝第十六章を読んだ。一月十四日。十時に起きた。朝食後、大岩と中野とマタイ伝第十七章、第十八章を読んだ。吐酔は里帰り。〉

グリフィスが福井を去ったのは一月二十二日であったからグリフィス福井滞在期間十ヵ月半のうち四ヵ月を吐酔はグリフィスと生活を共にしたことになる。その間、母と兄がそれぞれグリフィスの家を訪ね、兄は河和田産の赤い漆塗りの箱をみやげに持ってきた。また吐酔も二回里帰りをしている。これは一見のどかな風景に思われるが、田舎から寺の人が異人の家を訪ねるということはその身内にとってどんなに気苦労の多いことであったか。吐酔少年の家族への説得のいかに大変であったかは察してもあまりある。しかしそれにもましてすでに吐酔の知力は西洋への感知を目覚めさせるに十分であり、そこへ飛び込んで行く勇気ができていたに違いない。グリフィスの懐(フトコロ)に飛び込んだことは身を持って西洋人の生活習慣を体験することになった。いったい福井にあって前途ある少年で誰がこのような僥倖にめぐりあえたであろうか。

開成学校工業学予科入学

明新館で大勢の生徒といっしょにグリフィスから化学、物理、仏語を学び、またその先生の家では仏語の個人指導を受け、住み込み生徒といっしょに先生とひざをまじえて英語を通していろんな西洋文化を学び、とくに耶蘇教の礼拝を体験したことが、吐酔の生涯をふり返ってみる時、これらが吐酔によってどんなに立派に生かされてきたか分かる、それをこれから追ってみよう。

大学南校理化学教授グリフィスは「東京第四区一小区、教師館」に住居していた。吐酔はやがてグリフィスに呼ばれて、その「神田一橋門外開成学一番」に起居を共にすることになる。がその前、吐酔は武生進脩小学校の引接寺校舎で約一年、英語を教えていた。英語を教えるということはその文化を教えるということでもあった。

明新館英語教師英人マゼット（Edward Hutchington Mudgett）はグリフィスに送った手紙で吐酔について次のように知らせている。〈Takefu is the best city in Ken, now Toshui your old friend is teaching English there now, the school building is an old temple, and the scholars are numerous, this school was lately opened.〉（一八七三年二月十一日付）。武生の英学の始まりの記録として貴重なのであえて原文のままで引用したが、武生はすばらしい青年英学者を教師にもったものである。グリフィスと吐酔は友人であり、それは二人の生涯続いた。また吐酔が早くも武生で教師の経験をしている事実も後年、生かされている。

大学南校に入学した時の吐酔は大きな野心を懐いていた。しかし若き吐酔は精神的に微妙な立場に身を置かざるを得なかったことが次に引用する父乗永に送った気迫に満ちた文面からも察しられる。

そのⅠ〈今般越前ノ国ヨリ試補教職拝命ノ

企テニテ上京セシ僧中ニハ墓々敷試検ニモ不及徒ニ因循猶豫東佞西諂許多ノ金幣ノ耗費シ一モ成ス所ナク僅ニ試補ノ命ヲ受ケ帰ニ臨ンテ宿所ノ會計モ償ヒ難クヤウ〳〵僅カノ金ヲ調ヘ剰ハ己レノ衣類等ヲ売却シ辛ウシテ帰国セリトカヤ箇様ナル不体裁ノ僧侶帰縣ノ上ハ百倍ノ虚誕ヲ以テ高言ヲ吐キ愚民ヲ惑ワシ勧財ナトヲ行ハントスル事疑ヒナシ嗚呼是レラノ奸僧徒ニ教導職ノ名ヲ借テ勧財ノ実ヲ盗ム実ニ憎ムヘク又憐レムヘキモノカ今ヤ海外ノ教宗神州ノ人民ヲ帰教セシメント往々教徒ヲ送リ萬法ノ学術ヲ教エ漸ヲ以テ彼宗ニ入レントスル事必セリ然ルニ是等僧侶我国ノミナラス他国ニモ許多アリテ只一日ノ糊口安逸ヲ貪ボリ其各宗ノ管長ノ名ヲケスナラズ遂ニ大法ヲモ地ニ墜チシム吁嗟天乎将タ時運ニヨルカ小子人ノ悪叟ヲ云フヲ好ムニ非ラス各々自己反省シテ宗規ニ法トリ学問ニ志ヲ逞フシ猶教院ノ規則ニ依リ一日モ早ク中教院及ビ小教院ヲ設ケ僧侶ノ知識ヲ広クシ大法ヲ泰山ノ安キニ置テ従前ノ奸僧ニ自己前非ヲ悔ヒ正シキ教ヘヲ布キ外教ニ人化ヲ奪ハレサルヤウ僭罪ヲ省ミス一言ヲ贅メ尊父尊兄ニ報ス希クハ同志互ニ読シ一日モ早開智達才ノ道ヲ立テ後進ヲ将勧セシ事ヲ乞フ〉

その2〈此校ニ入ルヤ官史其何ノ科ニ従事スルヲ欲スルヤヲ下問セリ故ニ法学ヲ以テ之ニ答フ　開成学校学科表　英（イギリス）＝法学―（刑法経済　歴史　萬国公法　国勢）理学―（実事ニ就天下万物ノ生質ヲ明ニシ各ノ功能ヲ了知ス）工業学―（算数ヲ以テ始リ機器万般ノ運用並ニ製造建築ヲ以テ終）佛（フランス）＝諸藝学―（理学ノ大体ヲ以テ起リ其術能ヲ実地ニ行製造術ヲ兼ス）天文学　獨（ドイツ）＝鑛山学―（理学ヲ以テ始分析術ヲ主旨トシ数多ノ金石鑛物ヲ明検シ他我日本ヲ金府ト為ントス　医学ハ大学東校ニ属ス元泉橋門外ニ在リ　然ルニ他ノ従前ノ法学進歩已ニ遠ク小子輩ノ及フ所ニ非ス故ニ暫ク官命ニ因リ工業学豫科第六級ニ従事ス即チ福井笠原次男石田一也ノ次男佐々木権六ノ男等ト同級ナリ嗚呼予此輩ニ今日相及フ事ヲ得タリ夫光陰ノ冗費スヘカラサル学ノ勤ム可キ夫レ如斯カ士三日相見サレハ目ヲ刮テ相待ヘシト呂蒙ノ一言以テ徴スヘシ猶奮発一励遠ク此輩ノ上ニ表シ此輩ヲ目下視スル前日ニ千倍センヲ要ス尊父モ亦高力ヲ添フルヲ願フ〉

その1、その2はともに越前国今立郡松成村の今立乗永氏への手紙の一部であるが、明治の元号になってから三年後、府県の廃合が進みさらに一年半後、十八歳の吐酔はいまだ内向に燻ってはいるが学問の志を逞しくしている心の高ぶりは十分にうかがい知ることができる。奸僧という言葉など吐酔の気負った造語がいっぱい出てくる。僧侶自身が知識（キリスト教文明の）を広く求めなければ、外教（キリスト教のこと）の侵略をうけることになる。その危慎を父に訴えている。と同時に吐酔の西洋学の大きな目的を示唆していると思われる。

試験によって外国語学校英学生に選ばれたあと、開成学校に入った吐酔は、上京までの一年の空隙のためにいかに進歩に遅れたかに気付いて大いに発奮しなければならなかった。おそらく吐酔の柔和な心と明晰な頭はいくら雨が降りそそいでも満たされない土壌のように新しい真理を求めていたに違いない。

米国留学生活

それがやがて洋行を志願するまでに発展し、

ついに一八七四年七月十八日、グリフィスとその姉マーガレットの帰国に同伴して米国へ渡ることになった。吐酔によれば「北亜米利合衆国ペンシルバニヤ郡フィラデルフィヤ府カサリン町二千四百十二番グリフィス方同居」が最初の居住先であった。

ここに一八七五年五月十一日のニューヨークのユニオン神学校在学中のグリフィス宛吐酔の英文による手紙から一八七六年五月十七日の手紙までの都合、一一通の手紙のコピーがある。その差し出しの日付の順に文面の主な内容を追ってみよう。

①一八七五年五月十一日。フィラデルフィヤ

高橋修一郎からの依頼をグリフィスに知らせる。それは山岡成章からグリフィスに送った地図代金二〇ドルの支払いがまだない。グリフィスが日本を離れる時、家具を置いて行くので、それをE・Wクラーク氏らに売って得た金から高橋が山岡に支払うことになっているがクラーク氏らから金を貰っていない。山岡が気の毒なので、グリフィスにその旨よろしく善処を頼む。

②同年九月十三日。フィラデルフィヤ

ペンシルバニヤ大学の試験の結果は来週の水曜日まで知らされない。バーカー教授にフランス語よりMental and Intellectual Philosophyを選択したいと話すと、教授は卒業するつもりならフランス語は必修だと言う。グリフィスに頼っているので卒業できるかどうか確信がない以上、教授料免除も心配である。しかし高校よりも大学の方が良い知識が得られる。科学の研究には現代語が不可欠だし、古典の勉強には古典語も必要です。グリフィスは英語の力をつけた方がいいと言うが、高校も大学も英語以外の外国語をどうしてもとらねばならない。大学の方が先生もいいしドイツ語よりフランス語、算数より幾何、動物学より化学がいいからです。

③同年九月二十三日。フィラデルフィヤ

大学に入っている。製図器が買えず、授業がおくれる心配。修辞学のテキストArt of Discourse by Dayが一ドル五〇セントするので、教授にその借用を頼んだがだめだった。長野の善光寺について本堂、山門、仁王門、書庫、参道などの寸法。上人、僧など説明。

④同年九月二十五日。フィラデルフィヤ

グリフィスから受けている大きな御恩は決して忘れない。できる限りその万分の一でも恩に報いたい。グリフィスなしでは錨のない船でどこで漂流するか、難破するか分からない。教材を買う金がない。働いて得た金は下宿代などの生活費にあてねばならない。グリフィスの姉妹には従順だが、私の好意がつたわらないようなので悪い点は良心にかけて気をつけるから知らせてほしい。古い上着の裏地がすり切れた。グリフィスの姉のマーサは学校の仕事がいそがしく、他の姉妹も引越し直前で忙しくて直してもらえない。他の二着は流行おくれで誰にも笑われてしまう。仕方なくとっておきの一着を着るのであって、決して見せるために着ていない。いい服装をして何になるか。服装で他の学生と競争できようか。愚かなこと。服装で人に負けまいなどとは思ってもいない。引越しがすみ次第、グリフィスの姉妹に直しを頼み、できるだけ長く着たい。

⑤同年十月三日。フィラデルフィヤ、北一六番街一二二六番。

九月二十五日付の手紙のグリフィスから錨

のない船のたとえに不満の手紙があり、その誤解に対する言い分け。グリフィスは保護者であり感謝している。自分の本当の気持や思いがうまく書けなくて残念だが分かってくれると思う。グリフィスのともづなが解けるのを心配しているようにとられたが、いつも自分によかれとしてくれるグリフィスが腹を立てるはずがない。楠木正成の生涯について書く（3枚）

⑥同年十月十日。フィラデルフィヤ

狡猾な手段で将軍の地位を奪った北条氏の政権時代について書く。（四枚）鎌倉中期の武士青砥藤綱は賤しい身分であったが、北条時頼に仕え、引付衆に任ぜられたが絹の着物も着たことがなく、漆鞘の刀も差したことがない。（川に落とした銭一〇文に五〇文を費やして捜させた逸話で知られる―筆者）何か災害や気象異変が起こると北条氏はびっくり仰天しすぐ仏や八幡に祈って寺を建て、仏像を造り、人民のために良い政治をしようとした。災害は支配者の罪悪のあらわれだとの迷信があった。

⑦同年十月二十三日。フィラデルフィヤ

日本の茶についてのくわしい説明。（四枚）まず茶の栽培で茶摘みに最適の時は、晴れていて露でぬれる夜。中国から茶の種を持ち帰った明恵上人の歌を英語で紹介。「クモリナル　アメフラヌマニ　ツミテオケ　トガノオヤマノ　ハルノワカクサ」。茶道は「数奇」と呼ぶ完璧な秩序を要求する美学である。茶の入れ方で冬は茶わんに茶を入れて湯をそそぐ、夏は水に茶、春秋は水半分に茶そしてまた水半分。飲む時は客の少ない方が好ましく、一人飲むのをSpiritual　二人がSuperior　三、四人がTaste　五、六人がSuffusion　七、八人がDiffusionと呼ぶ。

⑧同年十一月二日。フィラデルフィヤ

坊主、もぐさ、みそ、しょうゆについての知識を書く。

⑨一八七六年二月二十五日。フィラデルフィヤ

二月十九日付のグリフィスの手紙を読んで、授業にいそがしくて返事がおくれたことから始める。約束したようにグリフィスの要求したことに出来るだけ忠実に果たしてきた。グリフィスのために何かする決心をしたが、グリフィスのいう「権利」という言い方に応じることはできない。グリフィスの出してくれる費用のお礼にどれだけでも仕事をするといったおぼえはない。恩人として最善の好意をしめしてくれた。グリフィスが約束を止めたなら、手伝いの約束も終わったはずだ。けれども結果はどうあろうと、グリフィスへの尊敬の気持ちとその仕事が日本の為になると思うと、これからも日本のことで調べてほしいことを言ってほしい。誠心誠意よろこんでやりたい。グリフィスの家での分不相応な親切なもてなしを受けて楽しい生活ができたのだから、約束を守りたい。しかしこれまでのような金銭上の責任はグリフィスにない。友人として良き忠告者になってほしい。自分は良き学生となって日本に役立つ人になるよう努力する。グリフィスの日本についての著述が完成し、欧米人の目を日本に向けたその人の名は欧米の人に知られ、また日本人の心にも永遠に刻みつけられると思う、グリフィスの寛大な賛美者として。

⑩同年四月二十七日。フィラデルフィヤ

グリフィスの質問への返事。日本沿岸での

貿易船の難破の追跡調査はない。あのサンパチの船が米国船に救助されなかったらこの話も残らない。黒潮にのり米国太平洋岸に漂着したと思われるが通信もなければ、戻ってきた者もない。言葉とその崇拝するものがその人の生国を知る最良の手段。アメリカインディアンに日本語と共通な言葉が少しでもあったり、何か崇拝物で古代日本のものに似ていれば、彼等が黒潮にのって太平洋を渡った確実な証拠になる。

⑪同年五月十七日。フィラデルフィヤ、ノースウエスト区　三七番　サンソム街。

グリフィスの象牙についての質問に答える。十九日学年末試験が始まる。書きことば話しことばとしての日本語についてどの文法書がいいか、またこちらで入手できるか知らせてほしい。

（以上一一通の手紙はグリフィス・コレクション蔵）

これらの手紙は吐酔がペンシルバニヤ大学入学後、約一年の間にグリフィスとどんなことがあったかなどを物語っている。グリフィスの書いている日本についての著述は、一八七六年ニューヨークでThe Mikado's Empire（日本題「皇国」）という六七七頁の大著となって出版された。吐酔が父乗永氏への手紙に〈彼カ我皇国ノ事情ヲ物ノ本ニ書キ付ケ予カ名ヲ本ニ載セント云ケリ〉（明治九年四月八日）とあるが渡米して一日二時間の暇をさいての執筆の手伝い。これはまた一八七五年三月より八月までの大学入学前と入学後も続いた。その取材協力の一例に青砥藤綱をあげると、「皇国」一四九頁の〈Among the upright men he (= Tokiyori) elevated to the judges' bench was the Awodo, who, for conscientious reasons, never wore silk garments nor a lacquered scabbard to his sword, nor ever held a bribe in his hand.〉の筆者傍線の箇所が吐酔の〈Aodo never wore silk dress nor lacquered sheath of his sword.〉と照合できる。

吐酔は大学に入学するまでの約一年はグリフィスの執筆を手伝いつつ、グリフィスの経済援助を受けて高校に学んでいた。しかし吐酔の大学入学後の援助の余力は不可能であった。日本を出る時、両者の間に〈若彼カワカ身ヲ支フル能ハサレハ何時ナリトモワレヲ送り返ヘストソ定メタリ〉（明治八年九月四日）の約束があった。とはいってもここまで来て、帰るに帰れぬ、返すに返せぬ二人の心境についてはその続きを見よう。

〈万一小子ヲ止メ置キニシテ他ノ親友ニ援助ヲ乞ハント欲スルモ耶蘇教布教ノ為ニ力ヲ尽ニ非サレハ一人モ其加担ヲスルモノナシトイヘリ小子ハ固ヨリ阿弥ノ本願ニ帰順シテ大心ノ光明ノ中ニ住シ末ハ永ク安養ノ浄土ニ生ヲ求ム身ナレハカカル時ニ臨ミテ一旦ノ苦労ヲ免レン為ニ苟モ耶蘇ノ徒ヨリ其教ノ為メニ一銭ヲ受ルヲ甘センヤ〉結局、グリフィスの重担を軽くするために自分で金を得る工夫をして続くかぎり在留することにする。

しかし極めて不自由な生活に自らを強いての毅然たる態度は、留学の目的は日本に役立つ人間になるためであると言い切った⑨の手紙によくあらわれている。米国にあっても〈真宗ノ門徒タル者ヲ能ク教化シ真宗の旧弊ヲ悉ク改正改良シ先ツ自ラ改メテ他ニ及ホシ真宗ノ人タルモノハ悉ク善良ノ風ナカランヲ欲ス〉（先の手紙の続き）と勤めているが、ここ

Philadelphia Apl 27/76

Prof. W. E. Griffis
Dear Sir

Your card has been duly received. The both kinds of grains of your inquiry were not known to the ancient Japanese even to the Chinese themselves. Maize was found in the west of China, hence they named it "Shoh Saeu" (Corn of Shoh) after the name of a western province. But the same received the name "To-kibi" (Corn of China) in Japan. The other grain, Indian corn, even the Chinese acknowledged it was found in India, and Japanese called it Namban Kibi, be-

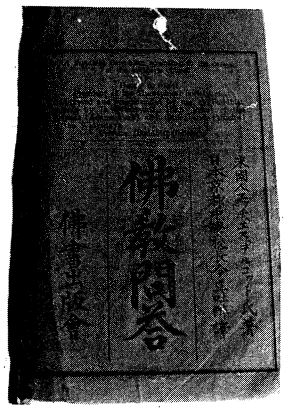
ペンシルバニヤ大在学中の吐酔がグリフィスに宛てた手紙(一部)
〔1876年4月27日付〕

で大事なことは、吐酔は〈自ラト同シカラシムノ意ニアラス〉と括弧に入れているように〈耶蘇教ノ日本ニ駸入スルモ是思想ノ自由ニ因ルナリ〉としているようにすでに吐酔の精神は〈思想の自由〉（同じ手紙のなかにある言葉）が体得されていたことを特筆しておきたい。ペンシルバニヤ大学日本人留学生今立吐酔は三月も末、友人の頼みで郊外の小都市に行って、二〇〇人以上の聴衆を前に日本の歴史風俗について英語の演説をしている。その時日本の婚礼の式や子供の育て様について話していた。他方、その吐酔の助力もあってグリフィスの日本の歴史と維新直後の福井に始まる日本体験の本が出版の運びに近ずいていた。

吐酔の著作

(1)　仏教問答　原題 A Buddhist Catechism according to the canon of the southern church
米国人エッチ、エス、ヲルコット氏著
日本京都中学校長今立吐酔訳　明治十九年
和装　四五丁　初版A五変型　仏書出版会

この英書を吐酔が訳すに到った経由は赤松連城が読んで著者の仏教に随喜しそれを広めようとの考えに感動し、それを吐酔に見せたところ訳して世に問うことになった。オルコット（Henry S. Olcott）は陸軍に務めていたが仏教徒になってから今のセイロン島に住み神智学（セオソフィカル）会の会長であった。オルコットのこの教理問答形式の教科書は一つには初学者に仏陀の伝記と教義をわかりやすく教えて南方仏教（小乗）を広めるためと、他方、島に入ってきたキリスト教の宣教を防ぐためでもあった。おそらくこの主旨に関心を持ったであろう吐酔の訳は平易を心がけただけあって全一六八問は今読んでも興味深い。訳文の一例〈第七十問此ノ如キ仏教ノ説ク所ハ　近世科学ノ許ス所ナルヤ否ヤ　答是即チ原因ト結果トノ説ナル故ニ最モ近世ノ科学ト符合スル者ナリ　科学ノ説ニ依レバ人ハ下劣ニシテ不完全ノ形相ヨリ漸次上勝完全ノ状態ニ昇進払充スル法則ニ従テ生成セシモノナリト云フ　第七一問此科学ノ説ヲ何ト名ルヤ　答進化〉



(2)　THE TANNISHO (Tract on Deploring the Heterodoxies)
今立吐酔英訳　　一九二八（昭和三年）
洋本　五一頁　A六版　東方仏教協会

序文で吐酔は歎異抄の思い出を感動的に語っているが、それがたま〳〵吐酔の六十八歳の頃の様子を知る上で参考になる。それは一九二三年九月一日の関東大震災時の横浜でのことだ。横浜地方裁判所の三階建の煉瓦ビルの落ちるなかで奇蹟的に逃げ出た。横浜の全市街が火と煙の中を税関所の一角の倉庫に避難したが、約二〇〇人が集って来た。そこはくずれかかった波止場の先端で荒狂った波の打寄せる狭い所であった。火の手が迫ってた。絶体絶命！その時であった。煙を吐いた一隻の船が大きなはしけを引いて現われて全員救助された。平静をとりもどした時、ポケットの歎異抄に気ずき目がいった箇所が第一条の最初の一節であった。

この彌陀の無限の慈悲に感謝の気持を分か

ち合いたい思いから出たのがこの英訳であった。訳では鈴木貞太郎大拙教授の世話になった。因に発行者は鈴木貞太郎、印刷は粟田部出身の島連太郎の三秀舎である。この英訳本は当時の旧制高校生に好んで読まれたといわれる。なお独逸語訳歎異抄（フェーレル、池山栄吉共訳）もある。

(3) 橋本左内絶筆の英訳

大正十五年、福井市の藜園会は、左内が長谷部恕連に贈った四言六句の絶筆を石碑に彫刻して左内の墓前に建設することを決議した。当日、会は建碑寄附者へ扇子一握ずつを分配し、その表面に絶筆を摸写し、裏面にその意味を略述した。（「橋本左内言行録」を参考）

グリフィスが一九二九年四月に福井を再訪した時、この絶筆と略述の英訳を吐酔に頼んだものらしい。一九二九年五月十一日付のグリフィスへ送った手紙にそれを同封した。その詩の原文と吐酔の英訳は次のようである。

常山之髪　侍中之血　日月韜光　山河改色
生為名臣　死為列星

The hair of Changshan, The blood of Shichung,
The sun and moon darken their rays,
Rivers and mountains change their colors,
While we live, act like the honorable subjects,
When we die, shine like the constellations.

グリフィスとの再会

五月十一日の手紙の頃、吐酔は兵庫県武庫郡本庄村深江に住んでいた。手紙によるとグリフィスは福井で永井環市長から前述の扇子を送られていた。吐酔は左内の漢詩の英訳で固有名詞は中国語の発音にした。その方が日本人には理解されなくても一般的だと思うと書いている。

日米親善の講演が目的で日本を訪ねたグリフィスは昭和二年四月二十五日に福井に着く。その途中の駅で一緒になった吐酔もグリフィス夫妻と福井駅に下り立つ。六日間の福井滞在中、吐酔はグリフィスの講演の通訳などをしてそのそばを離れなかった。その時の気持を吐酔は明新館の実験室でグリフィスに習った若い時代に返ったような気持であったとグリフィスに書く。がすでにグリフィス八十四歳、吐酔七十二歳の旧交を温める仲であった。

ところでその時の吐酔のことを今立成因氏はこのように記録しておられた。

〈昭和二年にグリフィスが五十余年で福井へ来た際、福井市ではグリフィスの再来を大に歓迎してもてなしたのであった。其の事が吐酔大人にも連絡があって、予は大人から福井へ行くからとの報があったので、予は鯖江駅から一行の列車に乗り福井駅へ着いたのである。車中、大人より一行の荷物が沢山あるから荷物の宰領役をするように臨時に依頼され、それを諾した次第なので予は一行と行動を共にすることになったのである。一行が福井駅にて下車すると駅前の広場に市関係、福井中学職員生徒、諸学校等関係者、市民一同が整列しておるので、グリフィス、同夫人、外務省随員、吐酔大人等整列し、そしてグリフィス氏は一同に対して挨拶の辞を述べた。次いで大人は直に通訳してこれを一同に告げたのであった。ところがグリフィス氏と大人と並んで立って居られたのだが、グリフィスは八十の老人とは云え堂々たる体軀であったのだが、大人の方が遥かに身長も高く颯爽たる立派な風姿なので、一般大衆は大人を遠来の珍客たるグリフィス氏と取り違えたらしい。（翌

福井高等女学校玄関にて（昭和２年４月）
〔前列右より５人目今立吐酔、同６、７人目グリフィス夫妻〕

『若越郷土研究』（福井県郷土誌懇談会）

日の福井新聞紙上にグリフィス来日と題して福井駅頭の写真をのせ、そしてその白髭長身の人がそれであると記してあったのでおかしかった。）そして一同はタクシー五、六台に便乗第一車には大人と予、第二車にはグリフィス夫妻、第三車には市長、福井中学校長、第四車第五車等と順位に旅館なる名和屋に向ったのであるが、沿道中学生や市民多数、日の丸、星條の旗を振り歓迎の声盛んであったのだが、しかし此の時も大人の顔を見てグ氏と思い旗を振りグ氏に対してはそれらしき動作をしないので、大人は一寸困った様な塩梅で珍客様は後の第二車の方だと後の方へ指をさして教へられるのだが、群衆には急にそれがわかり兼ねて居たような事であった。グリフィス氏が旅館に着いてからは大人はグリフィス氏夫妻の為めに実によく世話をして上げられて、グリフィス氏も大人のそれに安心して何もかも打ちまかせて居ったようである。外務省からグリフィスの随員にとて一人通訳人が随伴して来て居たのであったが、グリフィスが其の方へは一向見向きもせず、大人のみに話かけらるるので、其の随員は手持無沙汰で一向仕事がなくて困ったような顔付をして居ったようである。グリフィス氏は大人を呼ぶに昔のそのままにトスイ〳〵と吾が子を呼ぶようになつかしそうに呼んで居たのである。〉

吐酔の手紙（一九二七年六月八日付）によるとグリフィス畢生の仕事は明治史を書くことであった。それは仮に The History of Japan under Meiji Tenno's Reignであったようだ。手紙は吐酔がグリフィスにその本の日本語訳の同意を求めるものであった。そしてその翻訳から得た収益を、福井の若くして援助の必要な学徒の科学研究の助けに利用するつもりで、またそうすることがグリフィスの福井再訪の記念と、行動を共にした吐酔自身の記念になるかも知れないと控えめがちに書いた。さらに六月二十四日の手紙でも翻訳のことを考えてほしいと念を押している。グリフィスも最初の吐酔の手紙ですでにその要求に応じていたと思われ東京市麹町区帝国ホテル グリフィス博士とある封筒に Tosui will translate new book WEG's History of the Restoration と走り書きをしていた。ところがグリフィスは帰国の翌年の二月五日に急逝した。二人の友情の最後の美しい花がこの世では咲くことがなかった。吐酔はこの訃報を大阪朝日で知り夫人あてに深い哀悼の手紙を出した。たしかにグリフィスの「明治史」が完成していたらグリフィスが以前から書きたかった春嶽、左内のことも外国人によく知られていたであろう。残念で仕方がない。

あとがき

筆者はこれまで吐酔が一度、キリスト教に関心を持ち仏教を離れたと思っていたが、その考えは間違っていた。またグリフィスが吐酔を米国の大学に留学させたというのも誤解であった。グリフィスが総明な少年吐酔を自分の家に同居させ、日本に関する本の執筆の手伝いに吐酔を米国へ連れていったのが真実であろう。しかし吐酔がグリフィスとの出会いで得たものも大きく、それはグリフィスを通して体験した西洋文明を支える科学精神と思想の自由であった。そして西欧から学ぶことを日本の国の役に立たせたいというのが吐酔の立身であり学問であった。「仏教問答」のオルコットの言う〈此著述ニ対シ利益ヲ受ル

コト更ニ無之〉もし利益があっても〈慈善ノ行ヲ成度企モ有之〉の考えに学ぶ人であった。鈴木大拙をはじめとする哲学、仏教、教育の方面の人物との吐酔の交友については筆者は今は何も知らないが大いに関心がある。

吐酔の人となりについては今立成因氏の書かれた通りだと思う。その今はなき成因氏に二、三度お会いして、吐酔さんのことをお聞きできたのは筆者の大きなよろこびであった。成因氏の文章を自由に利用させて下さった満願寺のみなさんに心からお礼を申しあげたい。